日本災害看護学会 令和６年能登半島地震災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日:2024 年 2 月 18 日(日)
活動隊員：紫宇代　松田朋子

１．活動期間

2024 年 2 月15日（木） 12 時　～　2024 年 2 月 18 日（日）12 時

２．活動場所

珠洲市立大谷小中学校（石川県珠洲市大谷町 1 字 78 番地）
避難所使用者数 35 人（一時避難者あり） 21 世帯（2 月 18 日現在）

３．石川県珠洲市の被害状況（2 月 16 日 14:00 時点　石川県庁情報）

人的被害　死者：103 人　うち災害関連死： 6 人　負傷者：重傷 47 人、軽症 202 人
住家被害　全壊・半壊・一部損壊：12,673 棟

４．避難所の状況

【避難者数】

大谷小中学校からの 2 次避難者：60 人（最終 2 月 2 日）
1.5 次避難者：9 人(最終 1 月 29 日)
～派遣期間中の避難者数の推移～
2 月 15 日：39 人
2 月 16 日：34 人
2 月 17 日：35 人
2 月 18 日：35 人

- 派遣期間中、2 次避難所から完全帰還された方は 1 世帯 3 名だった。1.5 時避難所から完全帰還された方はいなかった。帰還の理由として、「一旦の避難としては良い環境であったが、大谷に電気が復旧したなどの良い噂を聞くと帰りたくなった。電気が来たなら少しずつでも片付けていくかという気持ちになった。」と話されていた。

【避難所運営】

避難所の運営は主に、避難所管理者および地域ボランティアによって自治運営されている。外部支援者として千葉県県庁職員が交代で常駐し、運営支援が行われている。救護要員として日本災害看護学会所属看護師が常駐している。被災後 2 か月経過した運営側の特徴として、避難所での役割を担いながら徐々に生業の再開や家屋の片付けなどを並行している点が見られている。

【避難所の生活状況】

ライフラインの復旧状況は、電気・通信は復旧済みである。依然上下水道は復旧していないため、飲み水はペットボトルの飲料水を使用し、生活用水には山水や雨水を利活用している。一時、避難所にタンクが持ち込まれ水道の開栓の実施を試みたが、亀裂や詰まりが生じた箇所があり、タンクの水は洗濯

などに利用している。多くの避難者が生活スペースとして利用している体育館では灯油ストーブで暖をとっている。やかんでお湯を沸かし乾燥を防ぎ、ある程度の湿度も保っている。2 月下旬に入り気温の上昇も見られる日にはストーブを止め、換気などに留意している。日中は多くの人が仕事や学校、自宅の片付けなどで不在となるため、避難所内に滞在しているのは数名である。残った避難者は、近隣の散歩に出かけたり、食事の準備などの運営に参画するなどしている。日中、避難所に残る 80 歳代男性の言葉では、「みんな、昼間居らんし、だんだん家に帰る準備しとるから、わしはここにおってええんかなって気持ちになる。2 次避難しなかったのは、業者さんに修繕頼んでも中々来んし、実際、順番待ちや。一時、ホテルにしたかて、帰ってきたら、ほい、直っとる。なんてことはないはずやから、じっと耐えてまっとかんとな。せやけど、皆、昼間、居らんなると、避難所におってええんかなって思うわ。」と話されていた。時間の変化に伴い、心理的に焦りなどが見られていた。日々の生活の中では、地域外へ避難されていた理容室の経営者が、一時、避難所に帰還され、避難所での散髪を実施。震災以降、髪を切ることができていなかった避難者の方々も、さっぱりしたと喜んでおられた。

5．支援活動の実際

【被災者への生活支援と健康支援】

健康支援の 1 つとして、毎朝 9 時からラジオ体操を大谷小中学校の生徒・学生も参加し、実施している。方言を用いたラジオ体操の動画を使うなどし、日常生活にユーモアも提供できるよう工夫した。ラジオ体操の時間は避難所内にいる避難者のほとんどが参加している。日々の生活のリズムの中においても支援者として変化を加えながら避難者が笑顔になれる時間を創意工夫したいと考える。

慢性疾患（高血圧）を持つ避難者に関しては、自宅でも血圧を測っていたという方や、血圧が非常に高く注意が必要な人については、朝または夕に血圧測定を実施した。内服の確認や、定期的な受診を勧め、珠洲市総合病院の外来の再開に伴い、巡回バスも大谷小中学校(避難所)前に停留することから、車の無い避難者も受診可能となってきた。

保清については上下水道が復旧していないため、WOTA のシャワーを利用されていると共に、天気が良く暖かい日には五右衛門風呂を利用している。また、自衛隊による入浴支援が実施されている場所まで社会福祉協議会が送迎を行っている。しかしながら、一部の避難者は入浴ができておらず、清拭にとどまっていたため、足の清潔保持、温浴による血流促進やリラクゼーションを目的に足浴を実施した。足浴を実施するなかで、被災者の方々から被災時の様子や現在の不安など、様々なお話を伺うことができた。支援側のスタンスとして避難者の個々の状況に応じた援助を提案していくが、先を見越し、自立を視野に入れた介入を考慮したいと考える。

【中長期に向けた地域全体の継続支援の検討】

■ **住宅再建・ライフライン**

今後の生活の基盤となる住宅やライフラインに関しては、「上下水道が復旧しないことには考えられない。」「道路が整備されなければ中心地までの移動に時間を要するため生活の不便さが改善されない。」「何から手をつけたらいいかわからなくて片付けられない。」などの声が聞かれた。住宅再建・生活再建の目処が立たず、不安に思っている方々が多くみられる。また、自宅の片付けに際しても、「ボランティアさんの依頼も考えるが、1 つ 1 つに思い出があり、一気に手を付けていく気持ちがわかない。」などの心理的な葛藤も見られている為、都度、情報の共有を図っていく必要

がある。

【今後の介入及び課題として】

■ 住宅再建

生活再建に関する情報を提供すると共に、現在の気持ちを傾聴し、どのように生活再建していきたいのか、目の前の目標を立てつつ意思決定を支援していく必要がある。また、「片付けるものひとつひとつに思い出があり、片付けるのに時間がかかるが、誰かにやってもらうよりも時間がかかっても自分でやりたい。」と話されている言葉から、ボランティアに来てもらって、効率的に片付けるというよりも、時間の経過とともに片付けながら傾聴し、個人の思いに寄り添う関わり方での介入が必要である。

■ 地域コミュニティ

2 月の初旬に避難所内から 2 次避難された方々の情報から「両隣の人も立山や金沢に行って、賃貸のマンション借りたって言ってたし、帰ってこないやろうから、どうしようか・・・」と、従前のコミュニティとの変化に不安を抱えていた。新たな形のコミュニティが形成できるよう、地域住民との交流を通して、できるだけ身近な方々とふれあい、再構築できるように支援していく必要がある。

■ 子ども・学校

現在、大谷小中学校の生徒・学生は学校再開とともに学業の時間が確保できるようになったが、学校内で避難生活を送っている。また、教員も 1 名、避難所での避難生活を送っている方がいる。そのため、学校と家庭生活のメリハリがつきにくい状況にあるが、各々、週末などに外出し、気分転換や切り替えを行っている様子も見られる。加えて、以前、津波を描いた 7 歳の男の子の遊びの変化としては、支援者と避難者の中学 1 年生と一緒に「ごっこあそび」するようになり、救護所前の段ボールで回転寿司屋さんやウーバーイーツごっこで遊んだ。とても良い表情でお寿司やジュースなどの絵を書いて、商品を作ってくれるなど、遊びを通じて昇華を促し、子ども達のメンタルケアにも努めていきたいと考える。

■ 支援者支援

被災者による避難所の自治運営が行われており、地域コミュニティの結束は強い。一方で、自宅の片付けや避難生活をしながらの避難所運営を行なっているため、疲労が見られる。

今後の課題として、長引く避難生活やライフライン復旧の遅延に伴う、心理的な不安や精神的なダメージを言葉で表出できるように傾聴に心掛け、外部支援者の健康管理にも配慮し、避難生活が安全に安心した環境となるように自立を踏まえた介入を行っていく必要があると考える。

6． 今回の支援活動を通しての内省と課題について

1. 自宅の片付けをする人が増えてきたため、怪我の処置など簡単な処置が必要な状況にあるが、道路状況等で移動に時間がかかるなど、受診や買い物が容易では無い。フェーズ移行に伴い定期的な医療チームの巡回などが無くなる中、処置に必要な物品が不足している。そのため、避難所としての応急処置グッズや自宅の常備薬のような役割のものをどのように整備するか、珠洲市等と避難所運営本部との調整が必要である。しかしながら、自立に向けての移行期を踏まえ、各地域で対応できるよう支援者としても考慮した介入が必要となり、柔軟な対応が求めら

れる。

2. 避難所から仮設住宅への移行期にあるため、被災者それぞれが持つ思いやニーズに合わせて支援やサービスに繋ぐ必要がある。個人の事情は様々であり、復旧・復興に向けての長期化に伴う心理的な支援などを丁寧に実施していく事が必要である。コミュニケーションを十分図り、今後の経過に応じた情報を共有しつつ、取りこぼしの無い自立に向けた介入を考慮し、地域で支え合える環境を共同体として見守っていく必要がある。

以上。

参考：活動の様子

写真１　　子どもと一緒に遊んでいる様子１

写真２　子どもと一緒に遊んでいる様子２

写真３　　足浴をしている様子

※避難者および各支援チームには、撮影と学会ホームページ掲載の許諾を得ている。